
暗闇の希望

凜音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗闇の希望

【Nコード】

N4782N

【作者名】

凜音

【あらすじ】

法律も国名も何もないこの国は何でも有りな世界。通り魔、強盗、殺人、何をしてても罪に問われないこの国で15歳の少女、蓮華は殺し屋をしていた。そんな少女の下に少年の暗殺の任務が来て彼女の運命の歯車は回り始める。少女と少年の不思議な出会いと関係を描いた友情恋愛物語。

序章

雪が降っていた。見上げれば母の顔。手を繋いで、体は寒いけど手は暖かかった。貧しくて辛い日々だけど母がいればそんなものへっちらだった、幸せだった。しかし、ずっと手が離れた。

「お母さん？」

尋ねても母は何も応えない。さっきまではっきり見えていた母の顔も今は影が落ちて見えなかった。母はゆっくりと歩き始めた。

「待って！待ってお母さん！！」

私は駆け出していた。息が苦しくてお腹が痛くなっても走り続けた。しかし歩いている母には一向に追いつかない。疲れた足がもつれてこけてしまった。ばつと顔を上げるがそこにはもう母の姿はなかった。変わりに自分のすぐそばまで広がる真っ赤な液体が広がっていた。ずっと続くそれを辿っていくとその先には人が倒れている。近付くとそれが誰なのかだんだんはっきりしてきた。

「お母、さん？」

赤いソレは眠っている母から流れ出ていた。母の真っ白な服は赤く染まっている。私は傍らに座りおそるおそる母の体に触る。その体は氷のように冷たかった。

「お母さん、ねえ、起きてよ」

小さく揺さぶってみる。しかしその瞼は開くことはなく、また返事

もない。何の応答もない母に私の不安は積もっていく。

「お母さん！お母さんってば！！」

今度は大きく揺さぶってみる。が、結果は同じだった。不意に自分の手を見つめる。震える手には真っ赤な液体がべっとりと付いていた。私はそれが血だと今初めて気づいた。

「いや…」

認めない、認めたくなどなかった。だが私の頭はすでに“答え”出してしまうていた。母はもう会えないと。母は死んでしまったのだと。

「いやあああああ！！！！！！」

私の悲痛な叫びは真っ暗な闇に響き、そして雪の中に消えていった。

序章（後書き）

なんだか初っ端から暗い始まり方になっちゃいました…
この小説がどういう展開を見せるのか、楽しんでくれたら嬉しいです。

第一章

重い瞼をゆっくり開いて何もない天井が視界一杯に広がり、目が覚めた。気分はイマイチだった。初めてあの夢を見た時に比べれば慣れたものだ。初めてあの夢を見た時は泣いて泣いて一日中泣いていた。

身近にあった時計を手に取り見ると5時半だった。目覚ましは6時にセットしてある。しかし目覚ましは鳴るより早く目が覚めるなんて珍しいことではない。これも慣れているというよりは慣れてしまった。

———プルルル：プルルル：

無機質な電子音が鳴り響いた。無言のまま受話器を手にとり耳に押し当てる。そして電話越しに若い男の声が聞こえてきた。

「おはようございます、蓮華様。早朝に申し訳ありませんがボスがお呼びです」

「分かった。すぐに行く」

そう短く言って相手の返事も聞かなくまま一方的に電話を切った。蓮華というのは私の名前。神崎蓮華^{かんざき れんか}、一人暮らしの15歳の少女。ある一部分を除けば普通の学生と何ら変わらない。彼女は今、殺し屋の幹部として夜働いている。

この国は何もない。国名すら付けられてない。あるとすれば【無国】それがこの国の国名だろう。そんな国に法律なんてたいそうなものが存在するわけがない。すれ違った人が自分を刺してもそれは罪に問われない。だから常に警戒心を絶やさないようにしないといけない。この国に信じられるものはない。唯一信じられるのは自分だけ。

蓮華は5分で着替えを終え、朝食を早めに済ませた。ボスという本部は学校と反対方向なので鞆は持っていくことにした。起床より30分経ったことを目覚ましで教えてくれた。蓮華は目覚ましを止めて家を出た。

「いってきます」

誰もいない家に言う言葉は空気に溶け込むように消えていった。家を出てから約30分ぐらい歩いた頃、目の前には大きな高級マンション顔負けの建物がある。ドアの前には黒いスーツを着た厳ついガードマンがいる。彼らは蓮華を見るとその頭を垂れた。

「おはようございます、蓮華様」

「ボスが最上階でお待ちです」

「分かった」

一瞥くれることなく建物へと入っていく。エレベーターに行くまでに何人が頭を下げ、誰が挨拶をしてきたのか分からない。ただただ蓮華にとっては鬱陶しかった。エレベーターが扉を閉めた瞬間、ため息が出た。

（うわべだけの挨拶ならしなくていいのに…）

蓮華のことを良く思っているのはボスを含む数名だけだった。いや、正確には「良く」というより「嫌っていない」の方が適切なのかもしれない。蓮華を嫌う者は多かった。蓮華の性格がそうしているのかもしれないが妬む者も数多くいる。そんな居心地の悪い場所に蓮華がいる理由はもちろんある。

———チーン

最上階に着いた。もう余程の者でない限り入ることは許されない領域。余談だが蓮華はボスの次の立場であり、ボスとほぼ同等の権利を持っている。少し歩くと奥にあるドアの前で止まった。深呼吸を軽くして二回軽く叩いた。

「入れ」

短い低い声が聞こえ入室の許可を得た。

「失礼します」

ドアノブをゆっくりと回し、ドアを開けて中に入った。中は人が一人だけいるには十分過ぎるほどの広さがある。前方の壁は全て透明の窓になっており、窓に向けて座っていた男性が椅子を回し蓮華と向き合った。

「早朝にすまないね」

40代ぐらいのこの男性こそ、殺しの世界でその名を知らない者はいないと言われる^{さかきむきよう}榊霧境。蓮華のボスだ。

「だが、学校に向う前に言っておかねばいけないと思ってな」

「いえ、ちょうど私もこちらに来る予定でしたので」

「そうか、ならよかった。まあ、座ってくれ」

こんな社会人なら誰でもありそうな会話。榊は部下に紅茶を2つ頼んだ。部下は一礼して出て行ったと思ったらすぐに戻ってきた。手には温かい紅茶が2つ乗せたお盆を持って。

（早すぎるだろ…出て行ってまだ2分も経ってないぞ）

そんなどうでもいいことを考えているうちに部下の姿はない。変わりに榊が目の前に座っていた。

「では、本題に入ろうか」

第一章（後書き）

中途半端だと思うでしょうが、とりあえずここで区切らせていただきます。

なんとなくこの世界が分かったのでしょうか？

第二章

学校に着いたのは8時ぐらいだった。蓮華の学校はこの国でも名門中の名門、小中高一貫の共学で一言でいう『お嬢様』『お坊ちゃま』な学校だ。蓮華はざわめく校門をくぐり抜け、自分の教室である3年A組に向かった。

——ガラッ

話し声で溢れかえっていた教室は蓮華が空けた扉の音で静寂になり、全員の視線が蓮華へと降り注がれる。その鬱陶しい視線を無視して蓮華は自分の席である窓側の一番後ろの席へと座る。蓮華が座ると同時にまた教室は騒がしくなり始めた。そして蓮華は心の内でため息を零す。

（なんで私が疲れなくちゃいけないのよ…）

蓮華は机の中から本を取り出して読みふける。蓮華にとって本は最高の外との関わりを絶つ手段だった。

——キンコンカンコン

チャイムが鳴り担任が入ってきて教卓の前に立つ。それと同時に日直が号令をかけて挨拶をする。どこにでもある学校の風景。そして簡単な連絡をするとすぐに1時限目の教師が入れ替わり入ってきた。

「え…はだから…こう…なって…」

教師の声なんて途切れ途切れにしか聞こえない。そもそも聞く気な

蓮華は少し考える素振りをして榊を見る。

「いつ、やるのですか」

「出来れば今日中だな。依頼者も早いほうがいいと言っている」

蓮華はまた少し考えてから口角をすつと上げた。

「引き受けましょう、この仕事」

蓮華の笑みは背筋が凍るほど冷たく、冷酷であった。榊は蓮華が引き受けたことに安堵の表情を浮べている。

「そうか、助かる」

「いえ、これも仕事ですから」

榊は苦笑をして背もたれに背を預けた。

「では、部下は何人必要だ。用意しておく」

「必要ありません」

榊は蓮華がそういうことが分かっていたかのように、驚くことをせず蓮華を見据えていた。

「だが、今回、いくらお前でも相手がでかすぎる。せめて50人は連れて行け」

「数があれば必ず勝つなんて保障はどこにもありません。逆に人数がいればその分、余分な行動が増え私の邪魔になります。はつきり言って足手まといの何者でもありません」

断言する蓮華に榊はため息一つついて諦めた。

「分かった。今回の仕事は蓮華、お前に一人に任す」

「ありがとうございます」

蓮華はそういうと残っていた紅茶を一気に飲み干した。そしてそつと立ち上がる。

「では学校がありますのでこれで失礼させていただきます」

「ああ。車を出させる。学校が終わったら寄ってくれ。その時にファイルを渡す」

「はい」

そういつて榊はファイルを手元にしまった。蓮華は短く返事をして、榊の部屋を後にした。

— — — * — — — * — — — * — — — * — — — * —
— — — * — — — * — — — * — — — * — — — * —
— — —

気が付けばもう四時限目が終わっていた。蓮華は昼食を持って席を立つと、またクラスのざわめきが一気に静かになった。クラスメートは蓮華が殺し屋をやっているのを知ってか知らずか蓮華と馴れ合おうとしない。逆に蓮華にとってそれはありがたかった。人を寄せ付けない蓮華は人と付き合うのが苦手なわけではないのだが、ただ“独り”がいいと思っているので一人でいるのが好きだった。

———コツ、コツ、コツ、コツ：

廊下を渡り、階段を上って屋上のドアを開く。普段は立ち入り禁止の札があるので生徒はもちろん、教師も入ってこない。誰もいない

この屋上だけが蓮華が唯一学校で心安らぐ場所だった。

————ガチャ

外に出ると吹き抜ける風が気持ちよかった。蓮華はコンビニで買ったパンを取り出して食べ始める。時間はたいしてかからなかった。少食な蓮華はパン一個とお茶半分で十分お腹一杯だった。

（残りは確か：英語と数学か：めんどくさいし、サボろうかな…）

うつすらそんなことを考えていた。サボりなんて蓮華にとっては珍しくもなんともない。教師も蓮華とあまり関わりを持とうとしないので怒らないし、サボることに決めた。

蓮華は寝転がって空に浮かぶ雲を何となしに見ていた。するとだんだん瞼が重たくなってきた。

（今夜は久ぶりに仕事もあるし：一眠りするか…）

“仕事”と考えた瞬間、脳裏に櫛の姿が浮かんた。そしてそれを消すように蓮華はそっと瞼を閉じ、意識を闇の中へと沈めた。

第二章（後書き）

今回はちょっと長くなりました？
暗殺まであともう2話ぐらい待ってください。

第三章

気が付けばもう放課後だった。時計を見れば5時過ぎ。日ももう大分傾いていた。

（そろそろ行くか…）

蓮華は立ち上がって屋上を出た。教室で鞆を持って校門へ向かう。色んなざわめきが聞こえるが他人のことはどうでもよかった。とにかくすれ違う人達は無視。校門には黒い高級車が一台止まっていた。

「お疲れ様です、蓮華様。ボスがお待ちですので乗ってください」

蓮華は言われるがままに車に乗った。車が走り出しても誰も口を開こうとしない。蓮華も窓の外の景色をボーッと眺めているだけで無感情だった。車を出して役30分で着いた。真っ直ぐ櫛のいるオフイスへ向かうためエレベーターに乗った。最上階に着き、扉の前で一つ深呼吸をしてからノックする。

「入れ」

朝と同じ短くて低い声が聞こえる。

「失礼します」

ドアノブを捻って中に入るとそこには櫛がいる。

「遅くなり申し訳ありません」

「いや、時間はまだ十分にある。君も何かと忙しいだろうからな」

榊の言葉に軽く一礼をする。榊は引き出しから朝のファイルを取り出し蓮華へ渡した。

「これが朝のファイルだ。後で確認しといてくれ」

「ありがとうございます」

手渡されたファイルを蓮華はしっかりと握り締めた。榊はコクリと頷き真剣な眼差しで蓮華を見据える。

「では、うまくやってくれ」

「はい。では、私はこれで」

深く頭を下げて踵を返す。部屋を出る際にまた軽く一礼をして静かに部屋を出た。帰りは歩いて帰ることにした。ゆっくりゆっくりと歩いた。ファイルを開いて中にあった書類を取り出し一字一句読み間違えずに目で文字を追う。全てを読み終えた頃、家に着いた。家に入って球形しているときに頭で先ほどの内容を整理した。簡単にすると内容は単純だった。

1. ターゲットはライエム卿の館
2. ライエム卿の館にいる人間及び研究者を抹殺すること
3. それが不可の場合、最低限写真の男だけでも殺害すること

この三点だ。ライエム卿というのは近頃有名な大企業の社長だったはず。その規模はこの国で1・2位を争うほどだ。噂では何かの研究をしているようだが何を研究しているのか誰も知らない。そんな館の研究員だ。1000人は超えるだろう。

(めんどくさ…)

しかし部下を呼ぼうなんて気は全くない。どれだけ相手がいようと仲間なんて邪魔なだけ。敵と一緒に殺す可能性だってある。それに所詮研究者など数がいってもその戦闘力はほぼ0に等しい。つまり数だけだ。これくらいなら一人で十分。気がかりなのは最後の“写真の男”だ。書類と一緒に同封されていた写真に写っている男はライエム卿ではなく、ライエム卿の息子でもない。

「誰だ、こいつ」

写真に写っているのは蓮華と同じ15歳くらいの青年だった。肌は白くて少しほっそりとした身体、黄色い髪に無邪気な笑顔が印象的だった。

しかし悩んでいても誰だか分かるわけでもなく考えるのを止めにした。とりあえず着替えをしようとクローゼットを開ける。そこには蓮華の仕事着がある。上は動きやすいようにノースリーブの真っ黒な黒い服。下は膝上30cmがくらいの短パンの上からもう少し長い真っ黒なミニスカートをはく。闇に溶けやすいように全身真っ黒な服を身に纏った蓮華は時計を見る。

（9時くらいに行けばいいか）

今は7時13分。夕食を食べようと台所へ向かう。しかし冷蔵庫にはものの見事に食料がない。

（…ま、食べなくていいか。別に死ぬわけじゃないし）

買出しに行くのがめんどくさくて夕食は食べないという選択を取った蓮華。やることもなくもう一度寝ようとベットに倒れこむ。すると昼間あれだけ寝たにも関わらず睡魔が襲ってきて途端に眠ってし

まった。

——カチコチカチコチ……

うつすら目を明けるともう9時前だった。蓮華は立ち上がり近くにある引き出しを開ける。そこには赤いリボンがあった。蓮華は大事そうにそれを取り出し鏡の前に向かった。鏡の前に立った蓮華はリボンに目を落とす。リボンは蓮華の手から垂れ下がっており、夢で見た血で真っ赤な手とダブって見えた。

「ッ！！？」

心臓が高く脈打って驚いてまたリボンへ目をやるがそこにはちゃんと赤い“リボン”がある。

「…幻覚をみるなんて、そろそろ本気でやばいかも」

自嘲気味に呟いた蓮華は高く結い上げた髪をそのリボンで結い上げた。鏡を見るとそこには先ほどまでの蓮華はいない。いるのは殺し屋幹部の蓮華だった。

（行くか）

別の引き出しを上開けてゴム製の特殊な手袋を取り出した。それをギョツと両手にはめて腰に小型爆弾や小刀などが入っているポシェットを取り付けた。そして玄関に置いていた刀を持つと蓮華は闇に溶ける様に部屋を出た。夜風は少し強かったが気持ちよかった。一時間ほどかけてライエム卿の館まで来た蓮華は立ち止まった。そしてポシェットの中にあるあの写真を取り出した。

「一体誰だが知らないがこの男を殺せばいいだけのこと」

蓮華の中でまとめた中の3のこの男だけを殺すなんて内容だけはない。蓮華にとって任務は完璧にこなすもの。依頼者が全員の抹殺を依頼されたら蓮華にとって全滅こそが任務。それ以下は存在しない。

蓮華は写真をポシェットにしまい、変わりに中から小型銃を取り出して短パンに取り付けた。ライエム卿の館についた蓮華は一つ深呼吸をして全て感情を心の奥に閉じ込めた。

「ゲームスタート」

そういうと蓮華は風のように消えた。そして長い長い一夜の幕が開いた。

第三章（後書き）

ようやく本編開始！みたいです。
次話から殺しが始まりますのでご注意ください。

第四章

ライエム卿の館は町から少し離れた森の中にあった。その中を駆け回る蓮華はまるで黒い風のようなだった。足をとめた蓮華はすつと目を細めた。目の前には標的のライエム卿の館が、そしてその巨大な門を守るようにガードマンが2人、裏に3人、その他にも周辺を歩き回っている者が多数いる。

「ご大層なことで」

ふっと笑みを漏らした蓮華は腰に差していた刀を抜き出した。蓮華の武器であるこの国では珍しい日本刀である名刀“氷桜龍”ひょうろうりゅうを構えた蓮華は一気に走り出した。地面を強く蹴って飛び出した蓮華に驚きを隠せないガードマンは声を上げようとする。しかしそんな暇を与えることなく蓮華は斬った。狙うは喉。普段は心臓か頭を狙うのだがここで大声を上げられて人数を無駄に増やされてはめんどろうだ。

———ザシュッ！

歩き回っている奴らを次々と切り捨てていく。喉を狙ってその首を胴体と斬り離す。不意に背後をとられた蓮華だが蓮華は妖笑を浮かべる。目の前の男の喉につきたてていた氷桜龍をそのまま横振りにして背後の敵の腹を斬った。

「がっ！」

その後倒れこむ男に情け容赦なくその心臓を氷桜龍を突き立てる。その時の蓮華の笑みはその場にいる全員を金縛りにさせた。一人のガードマンが自分達では無理だと判断したのか無線機を取り出して

応援を求めようとした。それに気づいた蓮華はポシエットから素早く小刀を取り出し目の前の敵を倒しながら携帯を持つ男にめがけて投げた。

——グサッ！

小刀は見事敵の喉に命中。蓮華にかかればどんな小さな敵でも百発百中で当たる。次々と倒れていく敵を踏みつけながら蓮華は次の敵を倒していく。わずか10分で門の外にいたガードマン達は息絶えた。蓮華は小刀や氷桜龍についた血を拭った。

「弱過ぎ。これじゃガードマンの意味ないじゃない」

呆れを含んだため息を零すと蓮華は館を見た。中はまだこの外の惨劇に気づいていないのか静かだ。だがそれももうじき慌しくなる。蓮華はポシエットから小型爆弾を取り出した。そしてそれを巨大な門に投げた。

——ドオオオオオオオオオオン！！

けたたましい爆音とともに中が騒ぎ出した。蓮華はそれに笑みを零しながら爆破された門をくぐりぬけ中に入っていく。中に入ると館は50mくらい先にあり、さっそく中にいたガードマンが出てきた。その数は外の10倍。そして彼らの手には銃が握り締められていた。

「…そうこなくっちゃ、ねえ？」

蓮華は一気に敵を斬りにかかった。一気に5人、10人、20人と次々敵の数を減らしていく。敵も蓮華も休む暇なく闘っている。敵は銃口を蓮華に向け発砲するが蓮華はそれを華麗に避けてその間合

いを詰めて敵を斬る。もう喉じゃなくてもいい。心臓や頭を狙い蓮華の服や顔は返り血で一杯だった。

「くっ、貴様は何者なんだッ!？」

一人の男が発砲をしながら蓮華に叫んだ。蓮華は無言のまま笑って男を斬る。蓮華は氷桜龍を横に振るっては返り血を浴び、死体を踏みつけては次の敵を倒していく。

「これでも喰らえッ!！」

蓮華を中心に円陣を組んだ奴らは一斉に発砲した。うるさいくらいの銃声音。そして弾がなくなった頃、円陣の中心を見るがそこに蓮華はいなかった。もちろん死体も。蓮華の姿を捜そうと目をキョロキョロさせる男達。すると、上から何か振ってきてそれを見るとそこには笑っている蓮華がいた。

「がはっ!？」

恐怖が身体を支配する前にその男は吹っ飛ばされていた。蓮華が男の腹を思いっきり蹴ったのだ。蓮華の姿を確認した他の連中が銃口を向けるが蓮華は次の弾を撃たせなかった。一気に間合いを詰めて鳩尾に一発食らわせるとそのまま手ごと銃を高く蹴り飛ばした。残りの数名が蓮華に向けて銃を発砲しようとして蓮華は銃のない目の前の男をぐっと引っ張って盾にした。

「なっ!!！」

気づいた頃にはもう遅い。引き金を引いてしまった弾は味方に当たってしまった。蓮華は相手の動揺の隙について先ほど蹴り飛ばして

落ちてきた銃を取り連射した。円陣を組んでいた奴らは次々に死んでいった。そして蓮華はまた新たな敵を見ては殺していく。そうして30分くらいたった頃、生きている者は蓮華ただ一人となった。

「もうちょつと楽しませてくれてもいいのに」

顔についた返り血だけ無造作に拭うと館に入っていく。これまたでかい扉で蓮華はまた小型爆弾でその扉を吹っ飛ばした。そして爆煙が晴れてきて見えたものは無数の銃口だった。

「撃てえッ!!!」

合図とともに蓮華に向かって銃が発砲された。10秒、いや15秒は銃声緒が鳴り響いた頃、ようやく銃声音は止んだ。しかしその場には蓮華がいない。

「ど、どこに行ったッ!? 隠れるなんて卑怯だぞッ!!」

「後ろだ、馬鹿」

すつと背後に現れた蓮華。氷桜龍を一振りして血を払い落とし鞘に収めた。

———チンッ!

やけに大きく聞こえる音に合わせて敵は一気に血を噴出して絶命した。残ったのは蓮華と男だけだった。

「な…ッ」

絶句した敵にゆっくりと一步一步近付き蓮華は言い放った。

「貴様に一つ、言っておこう」

口調が変わってその声は怒気で満ちている。敵は蓮華に圧倒されて足がすくんで動けなかった。そんな相手にもお構いなしに蓮華は言う。

「まず一つ。私は別に逃げも隠れもしないし、そもそも貴様らみたいな脆弱な奴らごときにする必要もない。見えないのは貴様らが遅すぎただけなんだよ。あんなにゆっくり間合いを詰めてやったのにもう少し楽しませろ」

蓮華はただ間合いを詰めて斬った後、彼らをすり抜けて後ろに立つただけ。他の余分な動作はしていない。ゆっくりと言っても蓮華の速さを見られる奴なんて世界に数人いるかいなかくらいだ。

「た、助け…」

「もう一つ。私のことは知っているか？」

「……黒い、死神…」

男は震える声で言葉を紡ぐ。蓮華はゆっくり頷いて笑った。そしてその頭に小刀が刺さった。男は驚いた表情のまま倒れた。倒れた男を冷淡な目で見下ろす蓮華。

「私は死神だから慈悲なんてない。覚えておくことね」

小刀を抜いて血を拭き取ってから蓮華は上に続く階段を上がった。そして思い出したようにふっと笑った。

「あ、でも次なんかないけどね」

クスクス笑う蓮華の笑い声だけがその場に残った。そして蓮華の姿も笑い声もなくなったその場は血と死体だけが残った。

第四章（後書き）

戦闘描写難しいです！！

上手くかけているかものすごく不安ですがどうでしょうか…？

第五章

現時刻11時半過ぎ：ほんの一時半前まで騒がしかった館も今ではしんと静まり返っていた。その中で蓮華はライエム卿の部屋に向かう。館の一番奥に設置された部屋の前に立つと蓮華はその扉に手をついた。

——バンツ

勢い良く開け放った扉の向こうには震えているライエム卿とその妻、そしてまだ幼い息子がいた。ガードマンはいない。当たり前だ、全員死んだのだから。蓮華は中に足を踏み入れる。途端、ビクンと肩を震わせる面々に蓮華は立ち止まった。

「こんばんは、ライエム卿、ご夫人、そしてお坊ちゃん。夜分遅くにすみませんね？」

蓮華は返り血を被った顔でにつこりと笑う。その表情さえ今は恐ろしく見えた。

「き、貴様、何が望みだ！？何が欲しい！？金か！？金が望みかッ！？」

この聞き飽きたありきたりの台詞。今までに何人もの人が泣き叫んで言った。

「私の望み？私の欲しいもの？あなたの命、ただそれだけ。ま、私からしたらどうでもいいんですけど、依頼、ですので」

「な、ならこうでどうだ！？その依頼者の2倍…いい、いや10倍は

出そう!!」

この台詞も聞き飽きた。蓮華は静かに鞘に手をやる。

「申し訳ありませんけど、できませんね。私にとって今夜の仕事はこの一つだけ」

「な。なら好きだけやる!! だからせめて妻と息子だけでも助けてくれ!! 頼む!!」

「悪いんだけど」

口調がガラリと変わった。鞘から氷桜龍を抜き出して切っ先をライエム卿に向ける。ざっと青ざめるライエム卿と大事そうに息子を包み込む妻と泣いている息子が目に映る。

「こっちはあんた達と違って暇じゃないんだよ。あんた達を殺した後、次は研究者達を殺しに行かないといけないんだから」

「な、何だとッ!？」

ライエム卿の表情が恐怖から一変して怒気に変わった。それまでして守りたい研究。だが蓮華が刀をズイッと差し出すとまたしても恐怖がライエム卿を支配した。

「ところで：一つ聞きたいのだがこいつは誰だ？」

蓮華はポシエットからあの少年の写真を取り出した。その瞬間、ライエム卿の眼が大きく見開き、慌てた口調で叫んだ。

「な、何故貴様がそいつのことをッ!？ い、いや、そんなことよりも依頼主は誰だ!! 誰なんだ!？」

「…今の状況が分かって言ってるの？ お前が私にそんな口を聞ける

立場であると思うのか？それに質問しているのはこちらだ。もう一度だけチャンスやる。こいつは誰だ！」

少し声を荒げて言う蓮華にライエム卿はぐっと言葉を飲み込んでしまった。そして少しの間を開けて決意したように口を開いた。

「言えん」

決意に満ちたライエム卿の眼をじっと見つめ、蓮華は目を軽く閉じた。そして、殺しの眼となって開かれた。

「そうか。ではもう貴様に用はない。…死ね」

突きつけていた刀を一旦引くと一気に斬りかかった。蓮華の攻撃をなすすべもなく受けたライエム卿はそのまま息絶えた。彼の死を目の前で感じた妻と息子は泣き叫んで近付いてくる。それを容赦なく斬って蓮華は刀を一振りして血を払う。振り返れば寄り添うように静かにそこにいる三人の家族がある。蓮華はそっと部屋を出た。

（さて、と…ここにこいつがないとなると、研究室か）

蓮華は研究室に向かって歩き出す。研究室はこの館の地下に作られている。血の匂いが広がる部屋を抜けて最奥にある地下への入り口に着いた。そして地下の入り口にいたガードマンを殺して蓮華はカードを奪った。カードを通すと機械で出来た扉は認証して扉を開く。扉の影に隠れて中野様子を窺う。

「…これは…ッ」

蓮華の目の前には白衣を着た男女の研究員、そして5・6歳の小さ

な子どもも研究者くらい、いやそれ以上の数がいた。

「なんでこんなところに子どもが…」

蓮華は戸惑った。立場上、蓮華は“全滅”の命令が下っている。ということとは研究者はもちろんのこと、こんな小さな子どもも殺さなくてはいけない。戸惑っていた蓮華だったがやがてそっと目を閉じた。

（私には関係ないか：今までだって殺してきた）

ぎゅっと氷桜龍を握り締めるとぱっと飛び出した。

「だ、誰だ!？」

突然の蓮華の出現に慌てる研究員。だが、蓮華は答えない。無言のまま斬りかかった。赤い血が白い白衣を染めて研究室を一気に彩った。思ったとおり研究者は抵抗という抵抗はしない。逃げようと必死だ。研究者は叫んで、子どもは泣いている。蓮華はネズミ一匹すら逃がさないように全員を殺していく。そして500名くらい研究員は15分で絶命した。しかし蓮華は一つ疑問を抱いていた。

「おかしい：あいつがいない？」

ターゲットである写真の少年が殺した研究者の中にも、子どもの中にもいなかった。もう一度殺した奴らの顔を覗いて確認するがやはりいなかった。

「全員殺しているのに。依頼者が間違えた?：いや、それならライエムのあの慌てようは…」

疑問が晴れない。誰かが逃げ出した形跡もない。もちろん上にいる可能性も少ない。いるとしたらこの研究室だけだ。思考をめぐらしているとなんか蓮華の髪を撫ぜた。

「…風？」

振り返った蓮華は微風を受けた。風の吹く方向に歩いていくと頑丈な扉があった。風はその扉の下からもれて出ている。蓮華は奪ったカードを使って扉を開ける。そして蓮華は驚いた。

「…なんだよ、これ」

扉を開けたその先にはまたしても頑丈な扉があった。蓮華がその扉を開くとまたしても扉が現れて…そんな動作を10回程繰り返し、ようやく最後の扉へと着いた。最後の扉にはカードではなく南京錠で閉められていた。しかし、当たり前だが蓮華は鍵を持ってなどいない。

「…フン、小ざかしい！」

蓮華は氷桜龍を鞘に収めて短パンにつけていた小型銃を取り出した。銃口を南京錠に向けて発砲した。

————バンツバンツバンツ!!!!

3発の銃弾が南京錠に向かって放たれ、南京錠は見事に壊れた。蓮華は思いつき扉を蹴り破った。

————バンツ!!!!

扉は綺麗に吹っ飛んだ。そしてその部屋の中には一人の生存者がいた。初対面だが蓮華は何度もその顔を見た。

「…見つけた」

「お前、誰？」

彼は、写真の少年は蓮華を見て首をかしげた。蓮華はゆっくり中へ入っていく。

「…蓮華、神崎蓮華だ」

「へえ、蓮華って言うんだ…いい名前だな。新しい研究員？それにしちゃ服装違うし…その顔についている赤いの何？」

「…私は研究者じゃない、殺し屋だ。私がここにいるのは依頼を受けて殺しに来ただけのこと。この赤いの何かだと？そこらに転がっている研究者達の返り血だ。今、この館で生きているのは私とお前の二人だけ」

少年は驚いて目を丸くしたが、すぐに元に戻った。

「ふうん、そんな仕事してんだ。で、何でここにいの？ここ俺しかいないのに。ライエム卿なら上にいるよ？」

「知ってる。ここに来る前に殺したし」

「じゃあなんでここに？」

ほわんとした少年に蓮華は冷酷にいい放つ。

「私の今回のターゲットはライエム卿ではなくお前だ。つまりお前を殺せば私の仕事は完遂させる」

蓮華はすつと少年に銃口を向ける。銃口を向けられた少年はこれまた驚いたように目を見張ったが、またほわんとした笑み蓮華に向ける。

「そっか。そうなんだ」

少年は笑って蓮華を見ていた。笑うというよりは微笑んでいたの方が正しいのかもしれない。ただ穏やかな顔がそこにあった。少年のそんな笑みに蓮華は驚きを隠せなかった。蓮華が相手にしてきたターゲットは死ぬ直前、泣いて情けを請うか、ただひたすらに怯えているかのどちらかだ。だが、この少年は笑っているのだ。それも恐怖で壊れた笑みではなく死を受け入れた笑みを。

「お前、私の言っていることが分かっているのか：お前、今から死ぬんだぞ：」

「みたいだね」

「私はお前を殺すんだぞ：死んでこの世からいなくなるんだぞ」

「あのな：いくら俺が馬鹿でもそれくらい分かるよ。失礼な奴だな」

少しむっとした少年は蓮華に言う。しかし蓮華はそんな少年の言葉を聞いているのか、いないのか、更に声を荒げた。

「ではなぜ笑ってられる：！？死が怖くないのか：ッ」

「死ぬのはそりゃ怖いよ。でも泣いて叫んだら見逃してくれる？それともそうして欲しいの？」

「そういうわけじゃ：」

蓮華の声が下がる。少年はにっと笑って蓮華を見る。

「だろ？じゃあ、死ぬときくらい笑っていたいじゃん！」

蓮華の思考は一時停止した。こんな奴は初めてだ。

「あ、そうだ！」

突然声を上げた少年に蓮華はガラにもなく驚いてしまった。が、少年は気にしてなく満面の笑顔で蓮華に言った。

「…何？」

「光輝。なみかぜ　こうき浪風光輝　って言うんだ、俺の名前」

「…なんで、こんなときに自己紹介してんのよ」

「だって、俺が蓮華を知ってて蓮華が俺を知らないっておかしくない？俺長い間ずっとここいるから俺と同じくらいの奴って会ったことねえんだよな…蓮華が初めてだったんだ」

嬉しそうに笑って蓮華を見る。蓮華は無意識に銃を下ろしてしまっていた。そしてこの光輝と名乗る少年の話を聞き入ってしまった。た。

「蓮華が今から俺を殺す殺し屋だろうとそんなの関係ない。嬉しかったんだ。だから殺されても名前ぐらい言っておかねえと成仏しようにも出来ないじゃん？」

蓮華は一言も言えないままずっと光輝を見ていた。光輝の笑みは嘘を語っておらず本当にただ純粹に喜んでいた。

「ただ…」

急に光輝の笑顔に影がかかった。蓮華はどうしたことかと光輝の言葉を待った。

「ただ：願いを叶えてくれるなら、外に出たかったかな」

「……………」

「ほら、俺、さっき言ったとおりずっとここにいるじゃん？最後の外の景色って2歳だったかな？だから記憶もあやふやで。だから外に、外の世界を見たかったな」

外の世界に憧れている光輝は天井を通り越して外を見るように目を細めていた。蓮華はゆっくり瞼を閉じてそしてそっと開いた。下ろしていた銃口を再び光輝へ向ける。

「そうか。聞いてやりたいが残念ながら時間だ。悪いがここで死んでもらう」

「だよね。それが蓮華の仕事だもん。いいよ、名前も伝えたし、もう心残りはねえからさ」

「そう……それじゃ」

————カチャ……

引き金に指をかける。焦点を光輝の頭に合わせた。

「さようなら」

————バンッ！！

蓮華は引き金を引いた。銃弾は光輝に向かって放たれた。長い長い一夜はこうして幕を閉じた。

第五章（後書き）

長かった第五章でしたがようやく準主人公登場です！！
と思ったらいきなり死亡！？というなんともいえない話でした。
次話でどうなるか、楽しみにしてください！

第六章

長い長い一夜が明け、蓮華は榊の許に向かっていた。朝のテレビはライエム卿の殺害が一面を飾っていた。街を歩いていてもあちらこちらでその話題で持ちきりだった。蓮華は何食わぬ顔で街を歩き榊の部屋の前に立つ。

——コンコン

「入れ」

「失礼します」

蓮華は片手に茶色い封筒を持ち中に入った。榊は爽やかな笑みをこちらに向け座るように指示をした。榊に勧められるままソファに座った蓮華の前のソファに榊が座った。

「昨夜はお疲れ様。上手くやってくれたようで安心した」

「ありがとうございます。これが昨夜の報告書です。ご確認を」

蓮華はすっとファイルを榊の前に出す。榊はそれを受け取りさっそく中を確認する。ざっとだけ目を通して頷いた。

「良く出来てる。後でもう一度確認しよう。しかし、また君の行動に下の者が困っている」

苦笑をもらす榊。そして榊は近くにあったリモコンで巨大なテレビのスイッチを入れる。音声が流れてテレビを見るとそこには焼け崩れたライエム卿の館とたくさんの焼死体が写っていた。榊は困ったようにふうと息をつく。

「あれだけ燃えてしまっただけは何も残っていないだろう。部下の死体確認も時間がかかる」

「それはただ、下の者が無能なだけのこと。私には私のやり方があります」

蓮華には蓮華の仕事スタイルがある。それを下の者のために変えるつもりは毛頭ない。はっきり言う蓮華に榊は声を押し殺して笑う。

「君はそういう奴だ。今更何もうまい。で、いつものを持ってきたんだろ？」

「はい。こちらです」

取り出したのは血がべっとりついた一着の服だった。蓮華は館を燃やす前に必ずターゲットの遺品を持って帰って証拠として榊に差し出す習慣があった。もちろん、証拠なんてなくても榊が疑うつもりはないのだがそれでは蓮華をよく思わない下の者がうるさいのだ。だからといって死体を持ち帰れるわけはなく、遺品という形を取っている。榊はそれを受け取りまじまじと見る。

「それはターゲットが着ていた服：死因は見ての通り銃殺です」

「うむ、これはこちらで鑑識に回しておこう」

「お願いします。それと：一つ、伺ってもいいですか」

神妙な面持ちで尋ねる蓮華に榊の笑顔が消え真剣な表情になった。腕を組んで蓮華の心を見るように蓮華を見据える。蓮華もそれに答えるように榊から目を逸らさない。

「：君から聞きたいことがあるなんて珍しいな。いいだろう、私が答えられるものなら答えよう」

榊はふっと口角を上げて頷いた。蓮華はでは、と思っていた疑問をぶつけた。

「ライエム卿は館で何を研究していたのでしょうか」

「何を、とは？」

「何かを研究するのであればどこか別のところにでも研究所を作ればいいのに、わざわざ自分の館に作るのはリスクが高すぎると思いますませんか？」

ライエム卿ほどの大企業の社長なら当然敵対者もいるし数も多い。もちろんライエム卿の研究を狙う者も少なくないだろう。そうすると自分の館に作るのは自分が狙われるのと同じこと。

「つまり、高いリスクを犯してでも自分の眼の届くところでしないといけない研究とはなんなのでしょうか。それに：あそこには5・6歳の幼い子どもがたくさんいました。あんな子どもを使う研究とは…」

「……………私も詳しいことは知らされていない」

榊の答えに少し気が沈んだ。裏の裏まで知り尽くしている榊ならもしや、と思って聞いたのだが駄目だった。だが、逆に言えば榊にすら知ることが出来ない研究。ますます疑念が湧く。

「だが、『能力』について研究をしているという噂を聞いたことはある」

「『能力』？それは超能力のことですか？」

「さあな。それにあくまで噂だ。デマである可能性もある。それに、ここからは私の推測だがその『能力』を何らかの方法で子どもに取り入れようとしていたのだろう」

「では、今回のターゲットは…」

「おそらくその『能力』を取り入れられた、いわば完成体ということだろうな」

「……………」

「まあ、これは私の推測にすぎない。私の知っていることはこれくらいだ。他に聞きたいことは？」

「いえ。ありがとうございます。では、私はこれで」

席を立ち櫛に一礼をして部屋を出ようとする。扉を開けた時、櫛に呼ばれて振り返った。

「今回の報酬は銀行に振り込んでおく」

「はい」

短く返事をして部屋の扉を閉めてエレベーターに向かう。足音が響く廊下を歩きながら蓮華は櫛の言葉を思い出していた。あそこで行われていた人体実験、噂が真実ならばおそらく櫛の推測は当たっているだろう。あの男はそういう所が妙に鋭い。今でも目を瞑れば子ども達の顔が思い浮かぶ。無邪気で無垢な顔が血に染まっていく。思い出すたびに蓮華は頭を振って忘れようとする。エレベーターの前に立って下のボタンを押すとしばらくしてエレベーターが来た。

————チーン

ガラスとドアが開いて中に入ろうとして黒いスーツが目に入った。片手に茶色いファイルを持って見上げれば飄々とした表情の金髪がそこにいる。

「お、蓮華じゃねえか！ 久しぶりだな」

「…久しぶり」

片手を上げて気軽に挨拶をするこの男は天魔雷^{てんまらい}。蓮華と同じ幹部の一人で数少ない蓮華の理解者の一人でもある。蓮華と違い部下からの信頼も厚く、誰でも気軽に接する彼の性格が人を引き寄せるのかもしれない。

「テレビ見たぜ。あのライエム卿をたった一人で殺したんだってな」
「悪い？」

喧嘩越し口調の蓮華を雷は全く気に留めずに笑顔を向ける。

「いや。一応褒めてんだぜ、これでも」
「…あっそ」

「俺もさ、昨日仕事だったんでもう眠くて眠くて…」

欠伸を漏らす雷。それを呆れたようにため息を零して蓮華は雷を睨むように見る。

「どうせまた任務前なのに寝ないでどこかで遊んでたんだろう。そういうのを自業自得の馬鹿っていうんだ」

「俺だってまだ18歳なんだぜ？遊びたい年頃なんだよ。蓮華だって遊びたい年頃だろう」

「別に。興味ない」

一緒にするな、と軽蔑にも似た視線を送るが雷はその視線をすらりとかわす。

「ふうん？ま、どっちでもいいや。じゃ、俺はボスにコレ出してるわ」

コレといって茶色い封筒を持ち上げる雷。それは先ほど蓮華が持っていたものと同じ報告書であった。

「……誰を殺したの？」

「…へ？」

雷は目を見開いた。珍しく蓮華からの質問だった。だが、なぜ雷が驚いているのか分からない蓮華は驚く雷に驚いた。

「どうした。何か変なこと言ったか？」

「いや。お前から話しかけるなんて珍しいなって…」

他人と関わらない蓮華は口を開くことすらあまりない。話しかければ短いが答えてくれるが蓮華から何か言ってくることは仕事以外少ない、というか全くない。これも仕事といえば仕事なのだがそれでも蓮華から話しかけてくるのは珍しかった。

「別に。ただ聞いてみただけ。言いたくないなら別に言わなくてもいい。そこどいて」

蓮華は雷をエレベーターから出して入れ替わりに自分が乗った。1階のボタンを押して扉を閉めようとした。しかし、雷がエレベーターが閉まる直前、手を入れてそれを阻止した。無理矢理こじ開けて顔が覗かせれるくらいあけた雷の顔は笑っていた。

「俺のターゲットはテル・ライトつつうおっさんだ」

「テル・ライト？あまり聞かない名だな」

「ま、社長だが規模が小さいしな。で、もう一ついうとお前の依頼者だ」

「つまり、私の依頼者がターゲットだったってこと？」

「そ。ついでに言うとな俺の依頼者はお前のターゲットだったライエム卿ね」

互いに互いの暗殺を依頼して同じ日に両者の目的が叶った。蓮華はふっと笑みを零す。

「相打ちが。馬鹿なやつらだ」

「だからこそ俺らはやっていける。じゃあな、引き止めて悪かった」

雷はにっと笑って扉から手を離れた。扉がまた再び閉まるまで雷は笑顔で無表情の蓮華に手を振っていた。扉が閉まってエレベーターは降下していく。静かになった個室で蓮華は榊と雷の言葉を反復していた。

（研究、人体実験、能力……チツ、真実を知ってそうな依頼者が死んだとはな…残る手がかりは…）

————チーン

エレベーターが1階に着き蓮華は会社を出て家に向かう。外の風はひんやりと心地よかった。30分かけて家に辿り着き、郵便受けに入っていた2通の手紙と新聞を取って家に入った。

「ただいま」

靴を脱ごうと手をかけたその時だった。

「おかえり」

返事が返ってきた。蓮華は驚く素振りを見せずに声の方を見る。そ

こには白い歯を見せて笑っている死んだはずの龍光輝がいた。蓮華は手に持っていた手紙や新聞を光輝に渡した。

「これ、テーブルの上に置いというて」

「分かった」

快く受け取った光輝はリビングに向かった。光輝が見えなくなつて蓮華はなんともいえない表情をした。内心、蓮華自身あまり実感が湧いてこないのだ。何年も1人で居て『おかえり』なんて言葉は何年も聞いてなかった。複雑な気持ちを抱えたまま蓮華もリビングに入った。中に入ると光輝がテーブルに郵便物を置いてテレビをじっと見ている。そこに写っているのは全焼しているライエム卿の館とアナウンサーだけ。何が楽しいのか光輝は目を逸らさずにずっと見ているのだ。

「俺、あそこにいたんだなあ」

吃驚、と蓮華に笑いかけた。蓮華にとっての“残る手がかり”：館も研究所も、ライエム卿も研究者も依頼者もいなくなった今、目の前にいる光輝だけが唯一の生存者。

「ねえ」

「ん？何？」

「本当にライエム卿が何の研究してたか知らないのか？」

本当を言うところの質問はもう何回かしている。そのせいか光輝は少し鬱陶しそうな視線を送る。

「だから知らないって何度も言ったじゃん。俺だって助けてもらっただけだから力になりたいし…知っているなら教えてるって」

光輝が嘘をついているとは思えない。嘘をつけるような器用な男に見えない。蓮華は予想通りの返答にため息しか出なかった。

（私…なんでこんな奴殺せなかったんだろう…今までだって殺してきたのに…）

そしてぼんやり昨日のことを思い出し少し後悔していた。

第六章（後書き）

準主人公復活です！いや、死んでないだけですけど…

そして天魔雷！結構、性格的にも気に入っているキャラなんですけど、しばらく出てこない予定？

第七章

——バンッ！！

「…え？」

小さな部屋に銃声と間の抜けた声が響く。蓮華の持つ銃から放たれた弾は光輝のすぐ横の壁にめり込んでいた。光輝自身は傷一つ付いておらず無傷のままそこにいた。蓮華は持っていた銃を下げて状況を飲み込めていない光輝に視線を向ける。

「…っていうのがいつもの私なんだけどな…ねえ！」

「へ、え、な、何？」

唐突に呼ばれておろおろする光輝にふっと口角を上げた。

「一緒に来る？」

「え…」

返ってきたのは意外にも優しい声だった。蓮華は光輝に近付いて銃を持っていない手を差し伸べる。

「一緒にここを出て私と来るかと聞いている。ただし、お前はここで私に殺されたことにされるから常に私の監視下の許に置くことになる。ま、ここでの生活とたいして差はないだろう」

口をポカーンと開けて瞬きする光輝は未だに今の状況が理解できていないのが手にとって分かった。

「ええ、つと：つまり、俺を連れ出してくれるの？」

ようやく理解が追いついたのか輝く目をして蓮華に詰め寄った。しかし、蓮華は期待に満ちた光輝の目を冷たく否定した。

「勘違いをするな。私の監視下の許でということのを忘れるな。自由が一切許されない上、この職業上何があってもおかしくはない。今お前を連れ出したとして明日までの命かもしれない、そんな日常だ。ある意味、ここより物騒な毎日になる。つまりお前に与えられた選択は2つ：一生束縛される生活を送るか…」

差し伸べていた手を引っ込めて銃を光輝のこめかみに押し当てた。

「ここで永遠の眠りにつくか、だ」

後は光輝が決めるだけ。蓮華にとっては光輝がどちらの選択を選んでもよかった。蓮華とともに居れば少なからず危険は伴っていく。その度に光輝を守る保障なんてどこにもない。ここで死を選ぶのもまた正しい選択なのかもしれない。

「行く」

光輝はしっかりと、そして蓮華の眼を真っ直ぐ見つめて答えた。その瞳には後悔なんて一欠けらもなかった。蓮華はその答えを聞くと踵を返して歩き出す。

「じゃあ行くよ。早いところここから出る」

「あ、あのさ！」

行こうとする蓮華を呼び止めた光輝。蓮華は立ち止まり視線だけを

光輝に見やった。

「何」

「何で、助けてくれるんだ？」

「…さあね」

蓮華はうつすら笑ってまた歩き出した。後ろから足音が聞こえないことからまだ光輝が立ち尽くしているのが分かる。

「私は気まぐれだからな。あんまりうだうだしていると殺すよ」

「な、ちよっと待てよ!!」

慌てて追いかけてくる光輝の足音が面白い。足音を聞きながら蓮華は先ほどの光輝の言葉が流れていた。

『何で、助けてくれるんだ？』

（そんなこと、私が一番聞きたいことよ…）

こんなことは初めてだった。いつも大人だろうと子どもだろうと誰だろうと殺してきた。それなのに何故かこの男だけは殺すのを躊躇ってしまふ。そして、任務を遂行できなかったのに何故か心が落ち着いている。チラリと後ろを振り返ってみれば息を切らして追いついてきた光輝が目に入る。

「これくらいでへばってたら明日から本気で生きていけないぞ、波風光輝」

蓮華が声をかけると嬉しそうに顔を上げてにっと笑う。息を整えて光輝は蓮華に言った。

「光、俺のことは光でいいよ。これからよろしく、蓮華！」

「…行くよ、光」

「おう！」

元気に返事をして二人はライエム卿の館から出て行った。外は血の匂いが充満していて、静かだった。あたりに転がっている死体を見るとさすがの光輝もぎょつとした。

「うわ…これ、全部蓮華が？」

「私以外の誰がすんのよ」

「……………」

「あ、そうだ」

さらりと答える蓮華に光輝は黙ってしまった。そして死体を見て思い出したかのように声を上げた蓮華は光輝に手を差し出した。その手の意味が分からなくて光輝は蓮華の手と顔を交互に見る。

「え、つと……………何？」

「服。脱いで」

「ええッ!？」

蓮華の発言に驚きを隠せない光輝は自身を庇うように腕を抱いて一歩下がる。どういう意味で誤解したか、蓮華は光輝を鈍い音をさせて殴った。途端、光輝は殴られた部分を押さえてしゃがみこんだ。

「つてー!!！」

「何誤解してんの!!！」

「え、だって服ってそういう意味じゃ…」

「今すぐその口塞がないとその口斬るぞ」

チャキと氷桜龍に手をかける蓮華。冗談なのか本気か分からないそのオーラに光輝は黙るしかなかった。氷桜龍から手を離れた蓮華はため息を零して光輝を見る。

「お前は今この瞬間から死んだことになる。その証拠として血の付いた服が必要なの」

「あ、そうなんだ」

納得したのかポンと手を叩く光輝。そしてさっそく上を脱ぎ始め服を蓮華に渡す。

「あ、でも血は……」

「光、腕」

蓮華に言われるままに腕を出すと今度こそ斬られた。パツクリ裂かれたそこからは血が吹き出した。突如斬られ血が吹き出す腕を見た瞬間光輝の顔から血の気が失せ一気に慌てだした。

「うわああああ！血、血、血いい！！！！」

「うっさい！！ほら、腕をこっちに！！」

暴れる光輝を引きずるような形で服に血をしみこませていく。やがて白い服が真っ赤に染まった頃に光輝を解放した。その目には涙をため今にも失神しそうな勢いだった。

「まったく…本当にこれがさっきまで笑って死にたいって言った奴か…」

「だ、だだだだ、だって……ッ！！！！」

「はぁ……」

蓮華はため息を零しながら服を適当な死体に軽く着させて銃を向ける。一発の銃弾が服の中心、心臓の部分に穴を空けた。

「これでよし、と。光、灯油搜してきて」

「と、灯油？」

「……火をつけるから早く搜して」

振り向く光輝は完全に泣いていた。情けなさ過ぎる男にまたしてもため息が出た。こうして蓮華と光輝は館に火をつけ無事に帰路に付いたのであった。

第七章（後書き）

だんだん蓮華の口調がおかしくなってきました…

男？女？…もうどっちでもいいや！！そんときの蓮華の気分で！！

…という大雑把な開き直りをどうかお許し下さい。

第八章

「蓮華ってば！」

光輝の声にはっと我に返った蓮華の目と鼻の先には光輝が居た。眉を寄せてむすつとしている。どうやら長いこと思いふけていたようだ。

「どうしたんだよ、ずっと声かけてたのに……」

「……別に」

今更過去を振り返っても仕方ない。蓮華は心の内でため息をついて近くにあった黒いコートに手をかけた。膝くらの丈の丈の真っ黒でシンプルなコートだが一見して高いものだとか分かるそれは明らかにお出かけ用だった。

「どっか出かけんの？」

「買い物。冷蔵庫の中もう何もないし」

そう、昨晚から中身がほぼ空の状態である冷蔵庫。何かしら買い足しをしなければならぬ。光輝が居るなら尚更のこと……。コートを着た蓮華はもう一着のコートを光輝に放り投げた。

「え、わっ！」

慌ててコートを受け取ったはいいが、その真意が分からなくて蓮華を見る。

「えーっと、蓮華さん、これは？」

「コート渡して家で寝てろって言うと思う？それとも今までそうしてた？」

「え、でも外に出さないって…」

「そんなこと言った覚えはない。私の監視下の許、自由は許さないといっただけだ」

「じ、じゃあいいの？」

光輝が目を輝かせて蓮華を見つめる。蓮華は息を一つついて何も言わずに玄関に向かった。否定をしていないその好意を肯定と取り、光輝は嬉しさ全開で蓮華の後を追った。

（やっぱり連れてくるんじゃないかった…）

本日、後悔2度目の真っ只中であった。目の前では『わーっ！』とか『すっげえー！！』と感嘆を叫んでいる見知った少年がそこにいる。2歳の頃から研究所を出てないこともあって光輝が興奮することは想定内だった。しかし、一歩歩くごとに『これは何！？』『あれは何！？』とか大声で聞いてくる光輝に人の視線はもちろん集まり、そして光輝に話しかけられている蓮華もちろん注目の的だった。

「あまりはしゃぐな！」

この台詞も何回目だろうか。そのたび光輝はごめんと笑顔で謝るのだが3歩歩いたらすっかり元に戻っている。だんだん恥ずかしさを通越して呆れ疲れてきた蓮華はため息しか出てこなくなった。しかし蓮華の心境を悟ってくれない光輝は未だにはしゃいでいる。

「蓮華どうしたの？どつか痛いのか？」

俯いていた蓮華を氣遣ってか心配そうに覗き込んだ。蓮華はじつと光輝を見つめ急にその手を取り早足である場所に向かった。

「え、わ、蓮華！？」

「……………」

何も答えない蓮華。よく分からないその行動に光輝は困惑していた。だが蓮華に逆らう理由をもたない光輝は蓮華に連れられるまま蓮華の後をついて行く。そして蓮華はある建物の中に入っていく。高級ブランド店だけを店舗しているそこはホテルと間違いそうなくらい内装は煌びやかだった。

「うわ…」

感嘆をもらす光輝と違って蓮華は眼もくれず目的の階まで上がった。3階について蓮華たちはある店に入る。

「ここ、服屋？」

光輝が言うとおりのそこは結構有名なブランド洋服店。店の奥からは品のある女性店員が営業スマイルと共に出てきた。

「いらっしゃいませ」

丁寧にお辞儀をして蓮華たちに挨拶をする。笑みを崩すことなくいる店員に蓮華は相変わらず無愛想なまま店をぐるっと見回した。

「こいつに見合うもの何着か欲しい」

「承知いたしました。では、見立てはどうでしょうか」

「全て任せる」

「分かりました。それではお連れの方はこちらに：少々お待ち下さい」

店員は光輝を連れて店の奥に行った。蓮華は別の店員に案内され椅子に座り光輝を待つことにした。

一方、光輝はというと店員に連れられて試着室にいた。試着室といってもとてつもなく広く、試着室というよりは一部屋に近かった。そこにはすでに2、3人のスタッフがおり光輝を見て一礼をする。

「こちらの方に見合う服を持ってきてください。見立ては全て任せております。サイズは：そうですね、MからLの間で十分でしょう。それでは取り掛かってください」

スタッフは「はい」と返事をする機敏に動き出した。見る見るうちに目の前にたくさんの服が積み上げられていく。小さな山になったところで店員とスタッフは光輝に向かっていた。

「それでは今から試着に入らせていただきます」

「お待ちせ致しました」

椅子に座って出されていた紅茶を飲んでいた蓮華の前に先ほどの店員が現れた。

「何着かご用意させていただきました。全てご覧になれますか？」

「ああ」

「では、こちらへ」

店員の後についていき試着室に入る。そこには先ほどと違う服を着た光輝がいた。

「こちらが1着目となります」

蓮華は光輝と光輝の服をまじまじと見た。上は白のノースリーブに黒のパーカーを着て下はシンプルに紺色のGパンを穿いていた。そして首にはアクセントとして十字架のネックレスがかけられている。一見、どこの服屋にでもありそうだがブランド店だけあって着心地が全く違う。

「紺のGパンは何にでも着合わせしやすい上、足をすらりと見せてくれるのでお客様の華奢な身体に合ったものをご用意させていただきました。上はシンプルにノースリーブとパーカーで解放感を表現してみました」

店員が説明をしてくれる中、蓮華はじつと光輝を見ていた。だが、だんだん恥ずかしくなってきた光輝は蓮華から目を逸らす。

「ま、いいんじゃない？ 光はどうなの」

「え、俺？ 別に俺はいいけど…」

「じゃあ次。着せなくていいから服だけ見せて。あ、その服は着ていくから脱がさなくていい」

店員にてきぱきと指示を与えて、残り5、6着を見た蓮華は気に入ったように頷いた。

「うん、全部買おう」

「ありがとうございます。では、お会計を」

店員はレジで計算をして、他の店員は服を袋に詰めている。

「失礼致します。お会計15万8千円でございます」

「15万ッ!？」

「はい」

声を上げる光輝と違って、涼しい顔で蓮華は店員にカードを渡す。

「失礼します」

店員は蓮華の手からカードを受け取り、レジの方へ行く。蓮華は振り返るとそこには硬直した光輝がいる。

「どうかした？」

「じ、15万って!何でそんなにするんだよ!？」

「一応高級ブランド店だしな。15万なんてまだ安い」

蓮華は「それがどうした」とでもいいそうな顔をして光輝を見る。

後期は俯いて徐に言葉を出した。

「俺…金持っていないし、15万なんて大金…」

それを聞いて何を光輝が落ち込んでいるのか分かった蓮華は静かに言った。

「安心しろ。私は他人に気を使うほど優しくもないし心も広くない。

アレは全てお前の金だ」

「…は…:…?」

光輝が声を上げるのと同時に店員が戻ってきてカードとレシートを蓮華に渡す。そのまま蓮華は店を出、光輝もその後を慌てて追いかける。

「ありがとうございます。またのご来店をお待ちしております」

閉まっていく扉の向こうで店員が丁寧にお辞儀して静かに扉は閉まった。

第八章（後書き）

だんだん蓮華の性格が曖昧に…

どうなっちゃうんでしょう…

次章、また新キャラ登場なのでお楽しみに!!

第九章

「アレ、どういう意味？」

「何が」

買い物が一通り終わった頃、ちょうど昼時でもあったので近くのカフェテラスでお茶をしていると光輝が突如口を開いた。蓮華は紅茶の入ったカップを口につけながら瞳を閉じている。

「ほら、服買った時に俺の金って言ってたじゃん」

「ああ、アレか。そのままの意味だが理解できないのか？」

そこまで馬鹿だったのか、と視線で訴えかける蓮華に光輝のこめかみに小さく血管が浮き出ている。

「だから！俺、金なんて1円だって持ってないって！」

今にも身を乗り出しそうな光輝に対して全く動じず紅茶を飲み干した蓮華はカップを優雅に置いた。そしてようやく光輝を見た蓮華は光輝の首を指差した、すると光輝は蓮華のその行動にさっきまでの勢いはどこにいったのか急に大人しくなった。

「な、何？」

「あの金はお前の首にかかっていた金だ」

「俺、首に金をかけたことなんてないぞ」

真剣な眼差しで言い返してくる光輝にため息が出た。やれやれと首を振り、蓮華は言う。

「お前を殺すことで入ってくるということだ。つまりは褒賞金。元々、私が依頼者に頼まれてお前を殺した後に私の講座に入る金だったはずだが、現にお前はこうして私の前にいる。お前が生きている以上、この金を私が受け取るわけにはいかない。だからといって依頼者はすでにこの世にはいない。ということは、お前の首にかけられたその金はお前が死なない限りお前の物だ」

長い説明に光輝は情けなくポカーンと口を開けているが徐々に理解してきたのか蓮華に確認する。

「つまり、俺が死ななかったら俺の金だけど俺が死んだら蓮華の金になるってこと？」

「そう」

「…因みに俺にかかったその金額は？」

「1億」

「い、1億!？」

光輝は身体を乗り出して大声を発して驚いた。蓮華は悠然とその場にいるが回りは何事かと一斉に光輝と蓮華に注目を集める。我に返った光輝がまた座り直し、やがて周りの視線も無くなった。

「俺の首にそんな大金が…」

「私からしたら十分少ないが」

「少ない!俺からしたらめっちゃ大金だ!」

蓮華の金銭感覚に光輝が怒鳴る。蓮華ははあと盛大にため息をついて光輝を睨んだ。

「いいか?私自らが仕事をやっているんだ。なのに1億?は、なめてんのかっての」

私自らを強調しながら蓮華は言う。今思い返せばイライラしてきた蓮華。

「じゃあ何で引き受けたんだよ」

光輝の言葉にピクツと反応をしめた蓮華だったが難しそうな顔をした。

（あ、あれ…聞いちゃいけなかった、かな…？）

黙ってしまった蓮華に焦りと不安が募っていく。しばしの沈黙の後、蓮華はようやく口開いた。

「近頃、まともな仕事をやっていなかったからな。たまには受けないと腕がなまるだろう？」

その時見せた蓮華の薄笑いは背筋が凍るほど冷たくて、仕事を、殺しをしている蓮華のあの笑いと全く一緒だった。目を逸らそうにも身体がすくんでしまっただけだった。

（こ、怖え…なんつう目してんだよ。忘れがちだけどこいつ殺し屋の幹部なんだよな？…よく生きてたな、俺）

内心そんなことを考えながら自分の幸運さと蓮華の気まぐれさに感謝しているのであった。

「それに…」

蓮華を見ると蓮華はさっきまでの冷たい目はなく、どこか遠いところ

ろを見ているような哀しいそうな目をしていた。

「蓮華？」

いつもと様子が違う蓮華は少しの沈黙の後小さな声で「なんでもない」と呟いた。気にはなったがそれ以上は聞くことはしなかった。いや、できなかった。

「さて、そろそろ行くか」

「あ、うん」

立ち上がって蓮華はいつもの蓮華に戻っていた。その様子にどこことなくほっと安堵する。

「次、どこ行くの？」

「とりあえず食品売場。もう食べ物がない。光には荷物運びをしてもらうからな」

「おう！任しとけッ！」

「…うるさい」

なぜか無駄にテンションの高い光輝に蓮華は小さくため息をつく。

「あ、まただ」

「何が」

「ため息。蓮華よくため息出るよね」

（…誰のせいで出ていると思っているんだ…）

言葉に出るのをぐっところえて毒づいた。だが、光輝のことを省いても蓮華はよくため息を出す。

「癖、かな」

「クセ？」

「いつの間にかしてしまうことだ」

「何で癖なんかなかったのさ」

「：さあ。私も知らない。小さい頃からよくしてたからじゃないの？それがどうかしたのか？」

問いかけたら何故か光輝は困ったように眉を寄せていた。光輝がこんな表情をするのは始めてのことだった。

「なんとなく聞きたかったから、かな：？俺にもよく分かんねえ」

「何それ」

「はは、ほんと、何だろ。とりあえずため息やめたほうがいいよ？幸せ逃げるし」

「：馬鹿じゃない」

蓮華は苦笑している光輝に背を向けて早歩きで進む。

「ま、待てよ！」

その後ろを必死に追いかけてくる光輝。だがスピードを落とすことなく振り返った。

「早くしろ。日が暮れる前に帰りたいんだから」

「まだ昼じゃん！」

「他に寄るところがあるの」

光輝が追いついたところでスピードを戻す。隣に来た光輝は首をか上げた。

「まだどこか行くのか？今度はどこに行くんだ？」
「鈴じいのところ」

第九章（後書き）

久ぶりの更新です！ しかもまたしても中途半端…すいません（汗
またしても新キャラ登場です！
次回もお楽しみに♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4782n/>

暗闇の希望

2011年10月7日22時25分発行